

死か狂か

死か 狂か 近代人の唯一路

すべてを得ざれば即ち無なり

ともかくもあゝ人生は死か 狂か

狂ひても行け ひと筋の道

死か 狂か 鐵火熱火に踊り込め

勇敢なれよ 破調の人生

生きんとす われ強烈に生きんとす

狂ひてもなほ生きんとするぞ

こけ笑ひ 泣くに泣かれぬこけ笑ひ
狂ひ死ぬまでこの世を笑へ

求むる生活 ダリアの情熱

眞夏眞晝の太陽の白熱

ダリア ダリア その情熱をわれ愛す
呪へり 怒れり 病床の閑日

白熱の太陽を思ひ 血を思ひ
生活を思ひ 病床を呪へり

闇黒 冷酷 苛酷の底より 求むる生活
太陽の白熱

白熱の鬭争の巻に踊り出よ
ナツバに血潮は生活の表象

熱 光 朝の空氣よ 生活よ
げにわれ切に求めて止まず

突貫 突撃 死線を突破せ
血潮の汚れは×をもて洗えよ

(アンチ賀川ズム)

泣く勿れ 悲しむ勿れ 新人よ
勇敢なれよ 汝が戦ひ

脈々のこの熱血をいかにせむ
病床 平和 呪へり 怒れり

人生は遂に一齣の悲劇なり
呪へ 戦へ 決して負くるな

死を撰べ 自由を得ずば死を撰べ
妥協を排せよ 孤軍奮闘

無題

ひとのため 社會のためと

云ふ奴の 腹の底まで

俺には分るぞ

人生は何うの 斯うのと云ふのかい

生き度いからだ

生きて行くのは

何とでも理屈をつけて

生きて行け

胡麻化して行け 行ける間は

飯を喰ひ

糞をたれ行く人生が

俺には すなはち生の充實

高遠の理想とやらが何になる

糞でも喰へ——

飯が喰へぬのに

飯も喰へず 眼ばかり

バチバチさせ乍ら

霊長などと濟まして居れるか

暑い日に 田の草取るのと

代議士の 地方遊説は

いづれが尊き

碌々に

性の要求も満されぬ

俺が悪いか 制度が悪いか

ヒネクレたこの根性は

恐らくは

子供の時には無かつた筈だが

平凡に たゞ平凡に暮せよと

俺に勧めし

彼の非凡人

貧と病の生活より

骨と皮 三十年の生涯を

工場に稼いだ

これが報酬か

骨と皮 この残骸を見せつけても

まだ労働を

神聖と呼ぶのか

病得て——

歸るにXも家もない

労働するには體力が無い

病得て——

夏も來たのに一枚の

浴衣が買へず裸體で寝て居る

搾るだけ 搾り取りたるそのあとに

病氣となれば

掃き出す工場主

塵の如く工場を掃かれ

塵の如く四方に散せし

俺達の兄弟

働けるだけは働いた

三十年の生涯に

残つたものゝ何があつたか

機械には油もさすが

勞働者が 病氣となれば

水さへ呉れず

うら若い青春時代を

煤煙に 埋れたことが

一番呪はしい

馬車馬の如く働き

馬車馬の倒れし如く

俺は倒れた

勞働者に病氣が來たら

最後だと 思つた晩から

すつかり重つた

理屈なく 俺は生きたい

死が怖い

貧苦に襲はれ 病魔に襲はれ

病得て

何うして 治すかといふよりも

何うして喰ふかに 餘計に氣をもむ

病みてなほ

稼がにや喰へぬ俺達と

遊んでゐても喰へ行く人々

無産者と名のつく以上

一層のこと こんな體は

持たねばいゝが

若い日を 女も知らず働いた

その報酬が

病氣と云ふのだ

「去年の秋の病ひに」と

云度ひくもなるよ

貧乏のためには――

病みてなほ 稼がにやならぬ世の中に

生き度くはなけれど――

生きさ度くはなけれど――

煤けたる天井をにらみ

働けぬ 自分を恨むと云ふよりも

この不合理な 社會を呪へり

夜も 晝も

煤けた天井見詰めては

好い考への 出る筈がない

今に見ろと

齒を喰ひしばり 骨と皮の

腕をくむには くんで見たれど

死ぬるなら たゞ一呼吸に

齒車に 喰はれて死んだが

俺には幸福

ナツバ着て 機械に向ひし

その時の 俺の姿よ

健康の姿よ

面白い 若い男女の色事も

耳には入らず

せつばつまれば

いま少し金があつたら

治る筈の 俺の病氣も

ついに癒えぬか

病氣さへなければど

皆 病人が考へる

その平凡な言葉の中には

病癒へず

喰ふに喰はれぬ この俺に

頼らんとする 哀れなわが母

今たのむ

ごとと一發今たのむ

この苦しみに堪えられるものか

世が世なら

労働者許りの世であれば

俺の病氣も治つて居るのに

天井には 生れた鼠が鳴いて居る

喰へずに鳴くのぢや

よもやあるまい

ひよつとして黙りこんだる

その時を――

人も怖るゝ、俺も怖るゝ、

杖つかねば

歩けぬ程の病人に

尾行がつけり 呪はしい制度

労働よ また放浪よ

監獄よ その果に

癒えぬ病氣となつたか

省れば 歩み―道は

灰色の 歩かにならぬ

道もその色

高尚なことでも考えて居る様に

人が思へり

金を思つて居るのに

病みて尙 尾行巡査が

ついて居る

かゝる制度に生きたくはなけれど

女の使ひ

俺の命は俺のが一つ

君の命は君のが一つ

金 金 金

俺の病氣の重りしも

治らぬことも みんな 金 金

「マルオクレ」「イマスグオクル」と云ふ様に
ありたいものだ
病氣の間でも

病める労働者の歌

二年前

巡査に蹴られた靴跡が
今も眞黒に残つてゐるぞ

脊中には坑夫時代の

傷のあと

足に眞黒い巡査の靴跡

奴隸から

ぬけ出ることを考へろ

必然なぞと濟まして居れるか

友や師と

親兄弟とも戦へり

こんな悲劇が何處にあるのか

口には下駄の齒入れを

奪びし智識階級に

踏まれし労働者

ヨツフエは

帝國ホテルに陣取れり

喰ふに喰はれぬ 日本の労働者

暗黒の石炭礦から

二 行 抹 殺

ナツバ着て工場にもぐれ

囚衣着て獄舎に へ

戦闘労働者

何處へ下も

行ける處へ連れて行け

裸になつたぞ 度胸は据つた